報告用紙②

関西学院大学　研究成果報告

２０２０年　５月　２０日

関西学院大学 学長殿

所属：　文学部
職名：　教授
氏名：　森田雅也

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	■特別研究期間　□自由研究期間 □大学共同研究　□個人特別研究費 □博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	上方文壇から分析する元禄期文化形成過程の総合的研究
研究実施場所	関西学院大学上ヶ原キャンパス　森田雅也個人研究室
研究期間	２０１９年　４月　１日　～　２０２０年　３月　３１日（１２ヶ月）

◆ **研究成果概要**　(2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

まず、研究課題の眼目である１７世紀における元禄期文化形成過程を探究する上で、最も重要であることは日本が鎖国中に形成した国風文化であるという既成概念を払拭することであると論点を定めた。そのために17世紀に先立つ１６世紀中頃から日本にやって来たヨーロッパ文化との接点について研究調査を開始した。

鉄砲が伝来(1543)し、キリスト教(1549)が広まり、南蛮貿易が盛んになったことでもわかるように、日本は急に国際化された。特にキリスト教の信者数は数十万人にもなり、短期間で海洋交易を学び、南蛮貿易と呼ばれる交易を行い、遣欧使節団まで派遣し、ついに16世紀後半からは、世界のどこの王国の世界地図にも「日本」の名が記されるようになったが、そのヨーロッパでの痕跡は従来の研究はキリスト教宣教師資料研究が中心で、文化交流としての交易の実態を示すものがあまり知らされていない。そのため、今までに森田はイギリス・フランス・ベルギー・オランダ・イタリア等の博物館・美術館・大学の研究機関を中心に追跡を行ってきた。特に、課題番号 17K02480)「上方文壇と地方談林俳諧文化圏との繋属関係の研究～海川・物流網を視座として～」(2017～2021,代表者森田）を得てからは本格化し、今回は特別研究期間を利用して、バルト海南東岸のエストニア・ラトビア・リトアニアからなるバルト三国を調査した(2020.4.25～5.3)。ドイツ等と同様ハンザ同盟の都市として発展したため、宗教や言語など西ヨーロッパ文化の影響を強く受けているものの、長い国家攻防の歴史から、北欧・ロシア・トルコなどを経てアジアとの文化

交流の痕跡も認められた。特に三国の首都である「ヴィリニュス」、「リーガ」、「タリン」の旧市街は全て「最も優れた状態で保たれた北ヨーロッパを代表する中世の商業都市」として世界遺産に指定されていることから、保存状態が良く、情報公開の態勢も整っていた。そのため、各所で古伊万里焼が大切に保存されているのが印象的であった。「色絵花卉門壷」であろうか、現在の佐賀県有田町を中心に製造された伊万里焼は、１６世紀後半からオランダ東インド会社から大量注文を受けて、積極的に輸出用の壷として生産されたことは知られているが、各所を経由してこの地に伝えられたものと推察できた。ただ、来歴は定かではなく、当時の交易品としてのみ保存されている。

また、ラトビア共和国の首都「リーガ」は「神戸」と姉妹都市を結んでいることから国際交流が進んでおり、本学とも縁が深く、2018年のラトビア共和国独立100周年の際に駐日大使をお招きし、学院史編纂室が中心となって数々のイベントが行われたことは記憶に新しい。また、ラトビア大学日本語学科は本学と留学生交換をしており、森田も人文学部を表敬訪問し、Agnese Haijima教授とお会いし、現在ご研究中の国芳等の浮世絵について意見交換した。今後の共同研究の可能性についても話し合えた意義は大きかった。

以上の１６世紀後半から１７世紀前半にかけての日本とヨーロッパの文化交流については、元禄期文化形成に繋がるものとして、別紙業績に示した単著「東アジアにおける黒船来航と外寇危機 ～十七世紀日本文学を視座として～」として『東アジア比較文化研究』(東アジア比較文化国際会議日本支部)第19号に論文化した(2020.2入稿、印刷中)。

そうなると今回の研究課題に基づいて分析を行うと、従来の研究では元禄文化の開花は、１７世紀後半から１８世紀初頭にかけての日本経済史上稀に見る全国的好景気を要因としているとみるのが一般的であるが、文化形成過程を巨視的に分析すれば、一概に結論を出せないことがわかってきた。

その文化誕生期はすでに１６世紀後半のヨーロッパとの交易から始まっており、１７世紀に入り、朱印船貿易による東アジア貿易によって基盤をつくり、鎖国後も長崎出島を中心とした絹糸貿易で経済力を強め、京都・大坂の上方商人による内需拡大の商法がそのさらなる発展に寄与していたことがわかった。この経緯は、単著論文「海賊と海商」、ハルオ・シラネ編『東アジア文化講座』（文学通信）として執筆したが出版が遅れている。

さらにそのことを１７世紀後半の元禄期文化の隆盛に大いに貢献した上方文壇の形成を一徴表として提示することで立証するため、井原西鶴を中心に考究し、別紙に示す論文・講演によって、その研究成果を公表した。

「西鶴と酒都伊丹」(伊丹市立図書館　2019.6.23)は大坂を機軸とした上方文壇に戦国期より文化の高い伊丹の文人たちがいかに関わっていたかとした。「西鶴は連歌師であったか？」(西鶴忌記念講演　2019.9.10)は西鶴の師の西山宗因が連歌師であり俳諧師としても全国に知られた文人であったが、若き西鶴が大坂俳壇の後継者として名乗りを上げ、京都俳壇、大坂周辺の俳壇をも従えて上方俳壇をまとめ上げたとした。これらは単著論文「俳諧師西鶴の軌跡－その蠢動期の再検討を中心として －」『人文論究』第69巻3･4合併号（関西学院大学人文学会　2020.2.20）によって、公表するとともに、大阪俳文学研究会主催シンポジウム「談林俳諧と俳壇の展開」(伊丹・柿衛文庫　2020.3.15)において、「延宝七年の談林俳壇後先」と題して登壇し、専門的見地を確認する予定であった。すでに、チラシ・ポスター等も作成し、国内外の関係学協会等にも広報されたが、直前になって、かかる社会状況のため中止となり、来年度に無期延期となった。

また、講演「井原西鶴と元禄文化－世界が注目する上方文学－」（NPO法人芦屋市国際交流協会　2019.11.16）ならびに「井原西鶴 ～世界初の経済小説はどのようにして生まれたか？」(芦屋市立公民館　2020.1.21)はともに、先に述べた巨視的な世界的な視野から西鶴の小説群を評価し直したもので、まさに元禄期文化形成過程に言及した内容であった。これらは日本文学史研究の上からも精査を加え、単著論文「古典文学における「物語」と「読者」－書写・印刷史を視座として－ 」『文学・語学』第227号（全国大学国語国文学会　2019.12.24）に研究発表し、すでに学界より一定の評価を得ている。

以上のように計画に基づき、順調に研究成果をあげられたが、「元禄期文化形成過程」とした以上、その終息期についても論じるべきであったが期間内に及ばなかったことを反省点として、すべての報告としたい。

以　上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内　博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。